

# 私の人類学のフィールドワーク —インドの元不可触民居住区での経験から言えること—

## My Anthropological Fieldwork: What I Can Tell from My Experience with Ex-Untouchable Quarters in India

根本 達  
NEMOTO Tatsushi

### 1. フィールドワークを繰り返す

#### 1. 調査地での1日の流れ

人類学のフィールドワークで大切なことは、何度も調査地に通い、長期間にわたって現地の人々と親しくかかわり合い、ほんの小さな出来事でも自分のノートに丁寧に書き残すことにある。その繰り返しによって関係性は深くなり、そこで記録した些細な出来事の積み重ねが突然、大きな発見に展開する。これは調査者本人にとっても驚きの経験である。

私はインドのマハーラーシュトラ州ナーグプルの元不可触民居住区で2001年から調査を行ない、現在までに合計27カ月間のフィールドワークを実施した（写真1）。同市では、B.R.アンベードカルに率いられ、1956年に元不可触民のヒンドゥー教徒が仏教へ集団改宗をした（写真2）。アンベードカルは不可触民解放運動の卓越した指導者であり、不可触民差別を受けながらもインド憲法起草委員長を務めた。死後65年が経った現在も「不可触民の父」と呼ばれ、インドでおおきな尊敬を集めている（根本 2018）。私は現地で仏教のビハラ（寺院）が運営する診療所の2階を無料で借り、そこを拠点にフィールドワークを行った。テレビや洗濯機などの電化製品はないが、ベッドとソファ、トイレがあり、1階にも仏教徒や仏教の僧侶が住んでいるため、非常に安全に暮らすことができた（写真3）。自分の国を離れ、現地の家に住み、現地のもを食べ、現地の服を着て、現地の友人たちと生きていく。このフィールドワークという人類学の手法はマリノフスキが1922年に『西太平洋の遠洋航海者』（2010）を発表し、確かなものとなった。

調査者はとくに外国において、出身国にいるときよりも弱い立場に置かれることになる。このためフィールドワークで安全な生活場所を確保することは、疲れたときに休んだり、夜に出来事をノートやパソコンに書き残したりするうえで非常に大切だ。つまり、現地で安全に暮らしていくことが第一にあり、この暮らしを基礎とするからこそ、落ち着いてフィールドワークに取り組むことができる。最初に私の調査地での1日の流れを紹介したい。まず朝はビスケットやバナナなどの軽食をとり、洗濯をする。前日に書き切れなかった出来事があれば、この後に書いておく。午前11時頃になると、ショルダーバッグをかけてフィールドワークに出かける。インタ

ビューの約束があったり、祭りがあったりすることが分かっていたら、直接そこに向かった。もし何も予定がなければ、元不可触民居住区にある仏教のビハラーか、友人の家か、活動家たちが集まる書店に向かうことにしていた。そこでは飲み水とチャーイ（ミルクティー）を出してくれる。それを飲んだのち、友人たちに話しを聞いたり、誰かインタビューできる相手を知っているか相談したりする。そうすると、その日のうちに新しいインタビューが取れたり、知らなかった祭りの存在を教えてもらったりすることができた。少しすると誰かが昼食に誘ってくれるので、その家に食べに行く。どのような家の造りなのか、どのような家族構成なのか、どのような食事をしているのかを見ながら、おいしい食事を残さずに食べた。



写真1：ナーグプル市内の元不可触民居住区。右側の後方に映る白い建物は仏教のビハラー（2017年3月3日、筆者撮影）



写真2：元不可触民が集団改宗した場所に建つストゥーパ。右はアンベードカルの肖像画（2017年9月28日、筆者撮影）

午後2時か3時頃になると、一度滞在先に戻り、ゆっくりと休む。とくに私の調査地では4月から6月頃までの日中に気温は40度を超える。午後5時過ぎになったらまたフィールドワークに出かけた。友人やインタビュー相手の家では、そこで起きたほんの些細な出来事や、友人が小声で言う悩み、出してもらった手作りのお菓子のことを忘れないようにしておく。午後8時頃になると友人の家で食事をする。仲が良かった友人の家であれば、誰でも食事を食べさせてくれる。インド料理は辛く、私は辛いものがとても苦手なので、友人の家族は私用に辛くないおかずを作ってくれた。それでも十分に辛いけど、食事は残さなかった。そうすればまた食事に呼んでもらえるからだ。食事の内容は平日であれば、野菜のおかずが一品、豆のスープ、チャパーティー（小麦粉で作られたクレープのようなもの）、ライスになる。ベジタリアンでなければ肉料理は週1回から2回程度であり、家族みんなが楽しみに待つごちそうである。夕飯を食べさせてもらおうと午後9時頃に滞在先に戻り、その日の分を書き終わるまでとにかく出来事を詳細にノートに書き記す。それが終わるとベッドで眠るという生活を繰り返してきた。

## 2. 調査地を持って行くもの

数週間のフィールドワークでも、数ヶ月のフィールドワークでも持っていくものはほとんど変わらない。これらの持ちものは日々の生活に使うものと、フィールドワークで使うものに分かれる。日々の生活に必要なものとしては、三日分の服、サンダル、眼鏡、財布、薬などがある。雨期には多少の苦勞もするが、服は三日分あれば十分だろう。また日本から出発するときは靴だが、調査地の人はみなサンダルを履いている。そのため現地に入ったらサンダルに履き替えていた。お金の管理も気をつけなければいけない。私はいつも小さなショルダーバッグ一つで調査を行っている。その中の財布には小銭や額の少ない紙幣だけを入れ、額の多い紙幣はショルダーバッグの内ポケットにしまう。その紙幣は、財布が盗まれたときなど、いざというときに使うためだ。薬もとても大事で、頭痛薬、風邪薬、整腸剤などは、飲み慣れたものを日本から持って行くようにしてきた。ただ現地で高熱やひどい下痢になったときは、現地の病院を訪れ、薬を処方してもらっている。一度、体のいろいろなところに蚊に刺されたような腫れがいくつもできたことがあった。原因がわからなかったが、現地の病院に行ったところ「熱アレルギー」であった。6月頃に気温が最高で48度ほどまで上がるため、その暑さに体がアレルギー反応を起こしていたとことで、現地の薬を飲んだら症状はおさまった。



写真3：筆者がフィールドワークの拠点としていた無料診療所。この2階に滞在（2005年2月17日、筆者撮影）



写真4：耕牛の祭りに参加する筆者。始まるの合図としてココナッツを割っている（2008年8月31日、根本由香理撮影）

フィールドワークで使うものとしては、ペンやメモ帳、ノート、デジカメ、パソコン、スマートフォンなどがある。このうち私はパソコン以外を肩から提げる小さいバッグと一緒に入れ、フィールドワークを行ってきた。人類学のフィールドワークでは日々の生活や祭りに参加しながら、そこで経験したことを記録していく。そのため、すぐに取り出せるペンとメモ帳が必要となる。参加しながら記録することはなかなか難しいが、現場にいればだんだん慣れていく。例えば目の前で祭りが始まったとき、私も最初は周りで見えて、メモを取ったり、写真を撮ったりし

ている。すると祭りをしている現地の友人たちが参加するように言うてくるため、もう写真を撮ったりメモを書いたりではできなくなる(写真4)。どこかで祭りの輪から外れたとき、メモを書き、写真を撮るが、また友人に呼ばれて祭りの中に入ることになった。これを何度も繰り返す。このメモと写真をもとに、その夜にひたすらノートやパソコンに出来事を書き残す。大事なものは記憶がはっきりしているうちに、できるだけ多くを書いておくことだ。そのときは些細な出来事や会話と思っていたものが後でとても重要なデータとなることは良くある。また私はヒンディー語と英語で調査を行ってきたが、もし調査で知らないヒンディー語の単語が出てきた場合、片仮名でそれをメモしておき、翌日に仲の良い知り合いに聞き、知らない単語を理解するようにしていた。

## II. 思い出し思い出される関係性をつくる

### 1. 飛行機とスマートフォン

長期にわたって調査地を訪問していると、調査地自体もおおきく変化していく。私の2000年代の調査と、2010年代の調査の間にある最も大きな違いは、グローバル化が急速に進む中で、現地で飛行機移動とスマートフォンの使用が爆発的に普及したことだ(この二つに続いて経済的に貧しい人たちの間で英語教育がさらに広まった点を指摘できる)。それまではデリーから列車で15時間前後かけてナグプルまで移動していたが、2010年代以降は低運賃で飛行機での移動ができるようになり、調査地に入ることが簡単になった。ただし、フィールドワークでは早く移動できれば良いというものでもなく、移動のスピードが速くなればなるほど時間が節約できる一方で、より時間のかかる移動の間に見えていたものが見えなくなる。現地での移動用に自転車を購入したときもとても便利だったが、スピードが速いため歩いている際には気がついていないものに気づかなくなり、結局のところ友人にプレゼントした。インゴルドも2007年の『ラインズ』(2014)で述べているように、私たちはゆっくりと歩き続けている途中にたくさんの発見をするのであり、道を歩く間もフィールドワークの一部となる。

またスマートフォンが普及したことで、現地の人インタビュー相手を紹介してくれることが簡単になった。このような人に会いたいと私が伝えると、すぐに友人に電話をしてくれて、その場で約束を取りつけてくれることが増えた。帰国してからも現地の人たちと連絡を簡単に取ることができるようになり、帰国後に聞き忘れたことをもう一度聞けるようになったこともおおきい。ただ以前は私が祭りなどについて何か質問をしたとき、そのことに詳しい知り合いを紹介してくれたり、友人みなで話し合ったりしてくれることがあったが、最近は分からないことをスマートフォンで調べて教えてくれることが増えた。このように自分の外にある膨大なデータを参考にできる知識のあり方は、日常生活で顔と顔を合わせた関係性の中で知識が伝達され、そこでずれが生まれていく知識のあり方とは違っている(写真5)。私自身について言えば、以前はノートに手書きで記録を残していたが、いまは現地でもパソコンを使うようになった。

## 2. 病気と友人関係

このような環境の変化の中でも、現地調査で最もつらいことは変わらない。それはインタビューがうまくできなかったことでも、自分がなまけて祭りに途中まで参加しなかったことでも、現地の友人と喧嘩をしたことでもなく、病気になることだ。私も熱アレルギーで蚊に刺されたような腫れが体中に出たり、40度の高熱が出たり、トイレの近くから離れることができないような下痢に苦しんだり、いろいろな病気にかかった。現地には肝炎、黄疸、腸チフス、マラリア、デング熱、チクングニア熱など、汚染された水を飲むことや蚊に刺されることでかかる病気がたくさんある。自分の出身国で暮らしているときは、すぐに病院に行ったり、薬局で薬を買ったり、消化に良いものを食べたりできるが、調査地ではそのようにはなかなかいかない。つまり、自分の国で暮らすときには利用できるネットワークを使えず、病気を含む多くのリスクにさらされる弱い立場にある。そのときに誰が助けてくれるかと言えば、身近な現地の友人たちになる。私も何度も病院に連れて行ってもらったり、滞在先まで医者を持ってきてもらったりすることもあった。その後、友人たちは処方箋を持って薬局まで行き、薬を買ってきてくれた。

2017年にひどい高熱に苦しんでいたときには、2日ほど友人の家で寝泊まりした。その際には、近所の人たちが何人もお見舞いに来てくれたが、私自身は何かウイルスに感染していて、お見舞いに来た知り合いにうつすのではないかと、高熱でぼんやりとした頭で考えていた。現地の人たちからすると、知り合いが病気になったにもかかわらず、お見舞いにも行かないことは正しい行動ではない。私自身は自分が人類学の調査に来ていると考えているが、現地の人たちから見れば、「人類学者」ではなく、ただの「友人」の一人である。さらに現地で「友人」というカテゴリーはそれほど強く働きかけるものではなく、長い間知り合いでいると、「友人」よりも「息子」や「娘」、「兄」、「姉」、「弟」、「妹」とみなされ、実際にそのような親族名称で呼ばれることになる。例えば私より年下で私に年が近い女性は、私のことを「ネモト兄さん」と呼んでいる。その場合、私自身も彼女に対し「兄」として振る舞うことが期待されている。人類学はおもに人と人との関係性を議論してきたが、もちろんその現地の関係性の中に人類学者自身も位置づけられているわけだ。

## 3. お土産と食事

私は日常生活で使うものと調査で使うものを60リットルのバッグに入れて現地に持って行くが、じつはこれは荷物の半分に過ぎない。残りの半分は現地の人たちへのお土産である。なぜこれだけのお土産が必要になるかという、現地の人たちがいなければ決して充実したフィールドワークができず、現地の生活環境の厳しさを考えると、誰かに助けてもらわなければ、そもそも無事に生きていくこともできないためだ。モースが1920年代前半に残した『贈与論』(2014)で議論したとおり、現地には「贈り物を与える義務、受け取る義務、それにお返しをする義務」という関係性があり、調査者も自らその中に入っていくことで、現地で安定した居場所を手に入れることができる。例えば相手に日本のペンをあげ、相手からインドのペンをもらう。ペンをあげてペンをもらうのだから、そのまま自分のペンを持っていけば良いのかもしれないが、実際には

ペンを交換することで、自分と相手との間にコミュニケーションが生まれている。自分で買ったペンと、人からもらったペンではそもそも価値が違っており、例えば人からもらったペンは、そのペンを見ることで、その人の顔が思い浮かぶ（写真6）。

お土産としては、子ども用と大人用に分けて持って行く。子どもたちにはお菓子とペンなどの文房具を持って行くことが多い。大人には服やバッグ、仲の良い人たちには安い腕時計を買っていくこともあった。ただし現地では年上が年下に贈り物をするのが習慣のため、仲が良くなれば良くなるほど、自分より年上の人たちがお土産を持って来るようお願いしてくることはほとんどない。一方で、同年代の友人や年下の子どもたちは遠慮なくお土産をほしがる。私が20代の頃は現地の友人たちも20代であったので、お酒や煙草を買って行っていた。また日本では子どもが使うものであっても、現地では大人が使うものであったりもする。少し高めのペンなどは、子どもにあげてから数日するとその親が使っていたりする。子どもにトランプをあげたこともあるが、現地では賭博に使われるものと考えられているため、とても驚かれた。このようなことから小さな発見がある。



写真5：スマートフォン内の宗教指導者の写真。映っているのは仏教僧侶の佐々井秀嶺（2018年3月16日、筆者撮影）



写真6：筆者が2005年4月のフィールドワークで使ったメモ帳。隣は友人からもらったペン（2021年1月6日、筆者撮影）

このようにお土産を配っていくと、帰りの荷物は大幅に減ることになり、バッグは半分が空になる。ただし、その代わりに数百枚の写真と数十ページから百数十ページの記録がノートやパソコンに残されている。それと同じくらい重要なこととして、現地での知り合いのネットワークをより確かなものとするができる。私が持って行ったお土産は、私が日本に戻ったあとも、私の代わりに現地にとどまり、私の友人たちに私の顔を思い出させる。私が再び現地に行ったとき、友人たちは私があげたお土産を私に見せ、「これはネモトからもらったものだよ。とても古くなったでしょう」と私に伝える。つまり私は、私がお土産を持って行き、現地の人たちから食事などの面で助けてもらうという交換関係の中に入り、それらのお土産や食事を通して「思い出し思い出される」という関係性の中に埋め込まれている。実際に私が日本でインド料理を食べれ

ば、現地の友人たちの顔を思い浮かべてきた。

### III. 自分自身を作り直す

#### 1. 小さな発見の積みかさね

ここまでも書いてきたように、フィールドワークは小さな発見の積みかさねである。インタビューが上手くいったときはたくさんの記録を書き、あまりできなかったときでも、日々の小さな発見をノートやパソコンに細かく書き残しておく。そして長く現地にいると、最初は気がつかない違いを徐々に発見できるようになっていく。こういったことを少しずつでもノートに書きためる。日々の生活の中でどのような発見があるのかについて、ここでは食事と結婚を取り上げてみよう。私はほとんどの食事を友人の家でしていた。友人の家で食事をしたときにまず気がつくことは、現地の人たちが手を使って食事をする事だ。おかずもライスもチャパーティーも豆のスープも、すべて一つのお皿の上で、手で混ぜて食べる。小さな子どもには親などが手でおかずやライスを混ぜ、子どもの口に入れる。私は「手で食べていること」を発見したわけだが、それは私が日本で箸を使って食べることが多いため、友人たちが手で食べているのを見ると、「手で食べている」と驚くわけだ（写真7）。このような発見はすぐにできる。



写真7：手で食べる子どもたち。親しい関係であれば一つの皿で食事をする時もある（2020年3月5日、筆者撮影）



写真8：ホーリーの1日目の夜の野菜料理。左側の上は祭り用に作られた特別なお菓子（2020年3月9日、筆者撮影）

それから何度も友人の家で食事を繰り返していると、すぐには気がつかなかったことに、次第に気がつくようになった。例えば調査地では肉料理と野菜料理が明確に分かれている。野菜料理しか食べない人もいれば、肉料理と野菜料理の両方を食べる人がある。両方を食べる人であっても、肉料理を食べる日と野菜料理を食べる日は決まっていることが多い。私がよく食事をしてきた家では、一週間のうちで金曜日と日曜日には肉料理を食べたが、それ以外の日は野菜料理だけを食べていた。とくに木曜日は聖者に礼拝する日であり、絶対に肉料理を食べてはいけない

た。また祭りの期間も何日目に何を食べるかが決まっていることが多い。例えば春のホーリーの祭りでは、神に礼拝する1日目は必ず野菜料理を食べ（写真8）、みんなで色水やカラーパウダーをかけ合う2日目は必ず肉料理を食べる（写真9）。逆に私が暮らす日本ではそのような習慣があまりなく、毎日肉を食べる人が多いと言うと、現地ではとても驚かれる。

次に私の調査地で結婚について調べていくと、いわゆる「カースト」がかかっていることに気がつく。カーストは現地の言葉で「ジャーティ」と言い、それは「(人の) 集団」や「(人の) 種類」を意味している。自分の結婚相手は自分のカーストの中で選ぶ必要があることから、カーストの定義の一つは、「その中から自分の結婚相手を見つけることができる集団」と言える。私の調査地の結婚のほとんどは「見合い結婚」であり、親を中心とする親族が結婚相手を見つけてくる（写真10）。私も最初は一人一人で相手を選び結婚すれば良いのではないかと安易に考えていたが、現地で調べていくと、結婚をめぐるさまざまなことが絡み合っていることが分かってくる。実際に別のカーストの人と恋愛し、駆け落ちをする人もいるが、多くの場合、親や親族とのネットワークが切れてしまい、孤立した困難な生活を送ることになる。駆け落ちをしたカップルへの激しい暴力が引き起こされることさえある。つまり、それぞれが個人で選んだ相手と結婚することと、結婚後も親族に支えられて生活することを両立するのは簡単ではない。レヴィ=ストロースが1967年に『親族の基本構造』（2000）で論じたように、何本もの糸が複雑にからみ合っている現地の結婚をひもとき、その一本一本の糸をフィールドワークを通じて理解していく必要があるだろう。



写真9：ホーリーの2日目。家の周りで大人も子どもも家族や友人と色水をかけ合う（2020年3月10日、筆者撮影）



写真10：仏教徒による結婚式。仏教の僧侶が新郎新婦を守るために二人の右手首に紐を巻く（2014年3月2日、筆者撮影）

## 2. 自分自身の「普通」への疑問

食事についても結婚についても同じだが、フィールドワークを通じて、それ以前の自分が「普通のもの」として持っていた考え方を作り直していくことができる。これがフィールドワークの醍醐味でもある。私は元不可触民の反差別運動と日常生活の宗教信仰の関係性について研究をし

てきたが、私自身の信仰心が薄いため、仏教のビハラーにせよ、ヒンドゥー教のマンディールにせよ、シク教のグルドワラーにせよ、イスラーム教のモスクにせよ、その中に入ることにいつも引け目を感じていた。自分が信じていないにもかかわらず、他の人が真面目に信仰する聖なる存在がいる場所に気軽に入ってもいいのだろうかとか、何のために来たのだと怒られるのではないとか、いつも心配しながら寺院の中に入っていた。また私の調査地にはほとんど旅行者がおらず、外国人が珍しいこともあり、自分の見た目が周りにいる人と違うことも気にしていた。

2012年の8月、私がイスラーム教のモスクに行きたいと言うと、仏教徒の友人がバイクの後ろに私を乗せ、市内でもっとも大きなモスクの一つに連れて行ってくれた。荘厳なモスクで、私は中に入ることをためらっていた。すると、その様子を見た友人が「ネモトが心の中から、ここにいる神さまのことを信じれば、何も問題は起きない」と笑顔で私に伝えた。友人は仏教を信仰しているが、モスクではどのように振る舞えば良いのかを知っており、私は彼の動作をまねしていった。モスクの中をぐるりと周り、外に出ようとしたとき、イスラーム教徒の若者がモスクの奥の事務所から出てきて、私たちに近づいた。私は「何をしに来たのか」と聞かれるかと思い、どうしようかと困ったが、その若者は私たちに「ちょうど食事の時間だから、中で食べていかないか」と誘ってくれた(写真11)。宗教集団の間の境界線はあいまいだと人類学で学んでおきながら、その境界線があると意識し過ぎていたのは私自身であったわけだ。



写真11：ナーグプル市内で最大級のモスク。市内の別の場所には有名な聖者廟もある(2012年8月26日、筆者撮影)



写真12：ナーグプル市内のグルドワラー。内部にはシク教の歴史を描いた壁画がある(2012年8月26日、筆者撮影)

その後、その友人とはマンディールにも、グルドワラーにも、イスラーム教の聖者廟にも一緒に行ったが、それぞれの場所でもどのように振る舞えば良いのかを彼は知っていた。例えばグルドワラーでは、彼はシク教徒の男性と同じように頭に布を巻いた(写真12)。他の宗教の存在を受け入れることの一つのあり方は、彼のように、自分が信じる宗教とは別の名前を持った宗教であっても、聖なる場所ではその信者と同じように振る舞い、「自分の心の中から、ここにいる

神さまのことを信じる」ことであると学んだ。このような現地の人たちとの関係性の中で、それぞれの調査者は多くを学び、自分自身が変化していく。例えば、それまではマンディールやモスクでどのように振る舞えばよいのか分からなかった私は、現地での生活を通じて、その寺院で敬意を示す振る舞いができるようになってきた。大事なのは、ある宗教の信者がその宗教の聖なる存在を信じていることを私が理解するだけでなく、その友人のように、ある宗教の信者と同じく、その場で自分もその宗教の聖なる存在を信じ、適切に振る舞うことにあるのだろう。そのようにすることで、その場で何が見えるのかを、少なくともそれ以前とは別の立ち位置から知ることができる。人類学で言うところの「現地の視点に立つこと」である。

#### IV. 責任をモチベーションとする

##### 1. 丁寧に記録を残す

フィールドワークは一人ではできず、現地で暮らす人たちに助けをもらいながら日常生活や祭りに参加し、ノートやパソコンに記録を残していく。現地の人たちはいろいろと用事がある中、調査者のために時間を作り、いろいろな質問に答えてくれる。私の調査を何度も手伝ってくれた友人は、いまではナグプルから離れた場所に住んでいるにもかかわらず、私がナグプルにいると電車で12時間以上かけて会いに来て、私の調査を手伝ってくれる。助けてもらうというのは、実際にインタビューの相手になってもらったり、インタビューの相手を見つけてもらったり、祭りや寺院に連れて行ってもらうだけではなく、食事やお茶を出してもらい、病院に連れて行ってもらうなど、そこには現地で生きていくための手助けも含まれている。ネットワークがより広がり、その関係性が深まれば深まるほど、新たな発見も増えていくだろう。

ただしフィールドワークは計画通りにはほとんど進まないと思っておくことも大事なことだ。私自身、2001年からインドでのフィールドワークを始めたが、調査地に行く前に用意しておいた質問に、こちらの勝手な期待通りに現地の人たちが答えてくれることはほとんどなかった。私の質問にほんの少しだけ答えてくれた後、現地の人たちは自分が話したいことを語り出した。私も最初は自分の質問を繰り返すなどして、何とか予定していたことを聞き出そうとしたが、そのことは途中でやめることにした。とにかくインタビュー相手が答えてくれたことを聞き漏らさないようにし、そのときは何の訳に立つのか分からない話でも細かくメモを取るようになっていった。その日の夜、そのメモと写真をもとにノートに詳細に書き残していく。インタビューや祭りだけではなく、家の構造や祭壇の配置、食事の様子などの日々の細かな出来事、ちょっとした発言などもメモをする。このように自分の研究テーマにとらわれすぎずに記録を残していけば、毎晩ノートに記録を書く必要が出てくるだろう。

とにかく記録を積みかさね、自分が経験したことを、他の人も読むことができる言葉にしておくことで、現地語だけではなく、現地での生活における振る舞いが次第に身についていく。例えば私の調査地では、自分の手で相手の足に触ることは相手に尊敬を示す行為とされる一方、自分のサンダルで相手を叩くことはつよい侮辱を与えることを意味する。そのため、もしある集団が

敵対するコミュニティの指導者の像の首に、誰も見ていない夜中にサンダルでできた首輪をかければ、翌日に抗議デモや暴力的な対立を引き起こすことにつながる。このように出発前には気がつくことのなかった点がいくつも発見されていった。人類学のフィールドワークでは、自分の研究テーマに関係がないように見える出来事も、とにかく丁寧に記録を残しておくことが大事だ。その記録が後に自分の研究テーマに厚みを加える際におおきく役立つだけでなく、調査が予定通りに進まなかった場合でも、別の方向から研究を進める手助けをしてくれる。そこで選んだ方向性は、出発前の設定したはずのテーマとは別であるかもしれないが、そこから新たに始まる研究の重要さに比べれば、テーマが変わることはおおきな問題ではない。それが現地のデータにもとづいているならば、むしろ歓迎すべき新たな展開と確かに言える。

## 2. フィールドワークの成果を共有する

ここまで見てきたように、人類学のフィールドワークでは、繰り返し調査地を訪れ、そこで生きる人々と長期にわたって関係性を持ち続け、日常の些細な出来事も見逃さないようにすることが大事だ。この積み重ねこそが自分自身を作り直し、大きな発見をもたらしてくれる。さらに最後にもう一つ付け加えたいのは、フィールドワークを行うことには、その成果を明らかにする責任をともなう点である。現地の人たちと自分との協働で生まれた研究成果を、そこにはいない別のひとと共有することが求められている。言い換えれば、フィールドワークは、誰かが時間をかけて私に教えてくれたことを、自分自身で考えたうえで、私が責任を持って別のひとに伝えていくことまで続いている。この共有を通じて私たちの視点は深まり、私たちが生きる世界の豊かさに気づく。

もしこの成果を人類学の一部として別のひとと共有したいのならば、現地で学んできたことをしっかりと人類学という学問の中に位置づける必要がある。この「位置づける」とは、自分自身が議論したいテーマについて、それまでの研究を読み、それに少しでも新たな考えを付け加えることだ。この点は人類学以外の学問分野でもおおきくは変わらないだろう。人類学にとってフィールドワークは、この新たな考えを発見するための最も重要な手法となる。もちろん自分の発見のおおきはそれまでの研究ですでに言われているのだが、それでもなお何か新しいことを論じようとする姿勢からこそ学問的に新たな発見が生まれる。

フィールドワークを行うことは、それぞれに責任を与える。現地で学んだことは一つも無駄にできない。現地の人たちの手助けのおかげでフィールドワークができるからこそ、自分の考えを論文として書くことができる。大切なのは、この責任をプレッシャーではなく、モチベーションとすることだ。自分が経験することができた豊かな世界について考え、丁寧に真摯に描いていく。フィールドワークを続けているのならば、思い出し思い出される関係性の中をそれぞれは生きているはずだ。現地の友人たちの顔を思い出しながら論文を書いていこう。そのとき、現地の人たちもまた自分のことを思い出していることを思い起こせば、さらに勢いよく筆を走らせることができる。

### 参考文献

- インゴルド、ティム 2014『ラインズ—線の文化史』工藤晋訳、左右社。
- 根本達 2018『ポスト・アンバードカルの民族誌—現代インドの仏教徒と不可触民解放運動』法藏館。
- マリノフスキ、プロニスワフ 2010『西太平洋の遠洋航海者—メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』増田義郎訳、講談社。
- モース、マルセル 2014『贈与論 他二篇』森山工訳、岩波書店。
- レヴィ＝ストロース、クロード 2000『親族の基本構造』福井和美訳、青弓社。